

## 大阪大学 外国語学部

### スウェーデン語専攻研究室とスウェーデン語



海外交流

清水育男\*

En kort presentation av svenska avdelningen på School of Foreign Studies, Osaka Universitet

Key Words : Swedish, English, Linguistic Relation, RIWL

#### 1. スウェーデン語研究室紹介

本学のスウェーデン語研究・教育は1985年にその前身である大阪外国語大学のデンマーク語学科に「スウェーデン語学科」を併立させて創設されたことにはじまります。したがって、2007年の大阪大学との統合後の現在もデンマーク語専攻とは緊密に連携を組みながら、教育・研究を進めてきております。両専攻語が連携をしているということは、地域的に隣国同士であるということばかりでなく、両者ともに同じ文化圏にあり、言語も歴史的に同じ系統に属しており、多くの面で相互に極めて類似しているからでもあります。

スウェーデン語の現在の研究室スタッフは、専任教員である清水育男教授（スウェーデン語学、スウェーデン語史）、高橋美恵子准教授（スウェーデン現代社会、社会学）、古谷大輔准教授（スウェーデン近世史、西洋史学）、ヨハンナ・カールソン外国人招聘教員の4人から構成され、他に非常勤の先生方とともに、研究はもとより外国語学部のスウェーデン語専攻の学生ならびに院生の教育・指導にあっています。スウェーデンに関してこれほど多面的な専門課程を用意してスウェーデン語教育を体系的に行なっている機関は日本では本学のみであろうと自負しています。ところで、本研究室は2007年12月にスウェーデン政府広報機関（外務省）Swedish

Institute より『2007年スウェーデン語教育・研究大賞』という功労賞を授かりました。ちなみにスウェーデン語を教授している大学は世界で41カ国、200機関以上あり、本賞はこれまでに北米で1大学、ヨーロッパで4大学に授与されてきていますが、本学の受賞はアジア・オセアニアでは初めてでした。受賞理由は次の2点です。

スウェーデン研究への真摯かつ長年にわたる取り組み、ならびに学生たちにスウェーデン研究へ大きな関心を生み出していること  
本学のスウェーデン語専攻が様々な方法で日本社会にスウェーデンに関する肯定的な見解の形成へと大きく貢献したこと

これは24年間、旧外大も含めてこれまでの多くの常勤・非常勤の教員一同が一丸となって日本ではマイナーと思われてきたスウェーデンについて地道に教育・研究を果たしてきた賜物であること、そしてこれらのことが、スウェーデン本国では重要視され、かつ高い評価を受けたことと理解しています。なおこの賞についての詳しい報告は、『阪大NOW 2008年2月号』（43頁）をご覧ください。

#### 2. スウェーデン語について

##### 2.1. スウェーデン語の文字について

スウェーデン語には英語にはない文字が3個ä, ö, åがあります。アルファベットの順番（たとえば辞書など）ではzの後にこれらの文字が配置されています。äとöはドイツ語を勉強された方なら、見覚えがありましょう。åは少し独特に見えますが、理科系の方なら、大文字のÅ、というよりは単位表記としてお馴染みかと思います。その読み方はオングストローム(10<sup>-10</sup>m = 100億分の1メートル)で、もともとスウェーデンの物理学者 Anders Ångström (アンデシュ・オングストゥルム、1814-74) の苗字



\* Ikuo SHIMIZU

1949年12月生  
ウップサーラ大学大学院ノルド語学科  
博士課程単位取得退学(1986年)  
現在、大阪大学世界言語研究センター  
ヨーロッパ・アメリカ言語文化圏研究部  
門I(スウェーデン語) 教授 スウェーデン語学  
TEL : 072-730-5351  
FAX : 072-730-5351  
E-mail : shimizu@world-lang.osaka-u.ac.jp

のイニシャルに由来しています。したがって、この文字はスウェーデン語では、「オ(ー)」と発音されることがわかります。ä と ö の文字は大陸のドイツから借用されたものですが、å の文字はスウェーデンで工夫されて作られ、いまではノルウェー語でもデンマーク語でも使われています(なお、文字 å の由来については『スウェーデンを知るための60章』第12章(明石書店、2009年)をご覧くださいと幸いです)。

## 2. 2. スウェーデン語が話されている地域

スウェーデン語が話されている地域は一体どこですかという質問に対して、「スウェーデン」という答えのみであれば、それは十分とは言えません。というのは、スウェーデン以外にも、フィンランドでスウェーデン語を母語としている地域があるからです。ボスニア湾を挟んだ北部スウェーデンとの対岸にあるフィンランド側の町 Vasa を中心に南北に伸びた海岸地域、またフィンランドの首都ヘルシンキを含んで東西に伸びる海岸地域、そしてスウェーデン本国とフィンランドの間に位置するオーランド諸島などにはスウェーデン語を母語とする人たちが住んでいます。日本では『ムーミン』で有名なトーヴェ・ヤンソンさん(Tove Jansson, 1914-2001)も実は、国籍こそフィンランドですが、母語はスウェーデン語です。したがって『ムーミン』の原典はフィンランド語ではなく、スウェーデン語で書かれているのです。このようにフィンランドでスウェーデン語を母語とする人たちがおよそ30万人おり、フィンランドではスウェーデン語がフィンランド語とともに公用語として認められています。スウェーデン本国に910万人そしてこの30万人を合計すると940万人近くがスウェーデン語を母語としていることになりましょう。

## 2. 3. スウェーデン語の言語系統

スウェーデン語は東の隣国で話されているフィンランド語とは言語学的にまったく別系統の語族に属しますが、他の北欧諸国で使用されている言語とはどのような関係にあるのでしょうか。南隣のデンマーク語、西隣のノルウェー語、北大西洋上の島々の国で話されているアイスランド語やフェーロー語は皆スウェーデン語と同じゲルマン語派の中の北ゲルマン

語に属しています。英語も確かにゲルマン語ですが、ドイツ語やオランダ語と同じグループの西ゲルマン語に属しています。ゲルマン語にはさらに東ゲルマン語に属すゴート語もありますが、これは今では死滅してしまっています。

デンマーク語やノルウェー語はスウェーデン語と文法が類似しており、あたかも互いに方言関係にあるのかと思われるほど近い関係にあり、相互に多数の共通点が見出されます。極端なことを言えば、スウェーデン語を勉強すると、デンマーク語やノルウェー語を特に習得する努力をしなくとも、ある程度はわかってしまう面白みがあります。これは英語のみを外国語として勉強してきた人たちには決して味わえない醍醐味であると思われる。

## 2. 4. スウェーデン語と英語との類似関係

それではここで、親戚関係が多少離れているにせよ、スウェーデン語がいかに英語に似ているかをお示ししましょう。まずは単語、そして語順について簡単に挙げてみましょう。

### (1) 同じ綴りで意味がほぼ同じ語:

[名詞] hand, arm, finger [形容詞] glad, full  
[前置詞] under

### (2) 綴りと発音は多少異なるが意味が容易に推測できる語:

[名詞] fot 'foot', blod 'blood', katt 'cat',  
fisk 'fish', båt 'boat', bok 'book',  
vind 'wind', bröd 'bread', dröm 'dream',  
äpple 'apple', vinter 'winter', sommar 'summer',  
mjölk 'milk', rum 'room', hjälp 'help'  
[形容詞] ny 'new', fin 'fine', lång 'long',  
ung 'young', god 'good' (cf. gud 'god'),  
hungrig 'hungry', rik 'rich',  
välkommen 'welcome', öppen 'open', sjuk 'sick',  
bättre 'better', bäst 'best', blå 'blue', grå 'grey',  
grön 'green', brun 'brown', röd 'red',  
kall 'cold', varm 'warm', död 'dead'

[動詞/助動詞] falla 'fall', gå 'go', äta 'eat',  
hänga 'hang', komma 'come', sitta 'sit',  
ge (=giva) 'give', ha (=hava) 'have',  
kan 'can', måste 'must'

[副詞/前置詞] ofta 'often', upp 'up',  
här 'here', där 'there', från 'from', i 'in'

他にも数詞をはじめとでもっと挙げることができますが、これで十分かと思えます。上に掲げた語彙の意味領域から、これらは人間の生活に根本的に根ざしているものが圧倒的に多いことがお分かりになりましょう。このような基本語彙は時代を経ても基本的にあまり形が大きく変わらないということを示しているといえるでしょう。

(3) 語順 (*det* = "it", *är* = "am/is/are", *jag* = "I", *som* = 関係代名詞):

語順も英語とほぼ一致していますので、上のヒントをもとに次の文の意味を推測してみてください。想像された以上に英語に近いという印象を抱かれるのではないのでしょうか。

*Det är varmt nu!*

"It is warm now."

*Jag går till universitetet.*

"I go to the university."

*Jag äter ofta ett äpple och ett ägg.*

"I often eat an apple and an egg."

*Jag sänder Erik en bok.*

"I send Erik a book."

*Jag kallar honom (= "him") Erik.*

"I call him Erik."

*Jag ser en man som sitter i rummet.*

"I see a man who is sitting in the room."

この例文からも推察できますように、語順も類似、語彙も類似とくれば、おしなべてスウェーデン人は英語が上手である理由は容易に納得されましょう。

### 3. 理工系の皆様には是非お願いしたいこと

昔からよく言われていることですが、スウェーデ

ン人の国民性については自分たちも認めるほどに一般に医学・理工系に強く、その証拠にこれらの分野においてはスウェーデンでは昔から世界的に優秀な人材を輩出しています。たとえば、先に挙げた Ångström しかり、植物学者 Carl von Linné (1707-78), 天文学者 Anders Celsius (1701-44), 化学者 Jöns Jacob Berzelius (1779-1848) そして Alfred Nobel (1833-96) などです。にもかかわらず、彼らの名前が日本語ではことごとく、間違っただけで流布していることはきわめて遺憾です。たとえば、Nobel 賞で有名な彼の名前はノーベルとされていますが、この発音ではスウェーデンではもちろん英語圏でさえも理解されないでしょう。強く読まれる母音は後ろの e ですから、「ノベル」であってノーベルではありません。Linné も日本ではリンネで人口に膾炙していますが、これもこの発音では通じないどころか、スウェーデン語では学術的な状況にはあまりにつかない意味(女性の下着)になってしまいます。正しくは「リネー」です。Berzelius もベルセリウスではなく、「バシェーリウス」です。少なくとも、Nobel と Linné の人名に関しては是非、「ノベル」そして「リネー」というように、スウェーデン語原語により近い発音を推奨・実践していただけたらというのがスウェーデン語を専門にしている私たちの切実なお願いです。まさに理工系のお膝元からこのような修正がなされてゆけば、日本に流布する誤ったスウェーデン像の是正にもつながり、さらには今後のスウェーデン学の健全な発展にも大きく寄与してゆくと確信しているからに他なりません。皆様と一緒に日本のスウェーデン学を育ててゆければと願っています。

#### En kort presentation av svenska avdelningen på School of Foreign Studies, Osaka Universitet

Svenska avdelningen på Osaka Universitet grundades 1985 vid sidan av danska avdelningen på tidigare Osaka University of Foreign Studies. Sedan dess har vi tätt samarbete med danska avdelningen för att bedriva Nordenforskning och undervisning. Just nu arbetar på svenska avdelningen följande personer bl a: Ikuo Shimizu professor i svenska språket, Mieko Takahashi associate professor i svensk samhällskunskap, Daisuke Furuya associate professor i Sveriges och Nordens historia och Johanna Karlsson svensk lektor. I december 2007 fick vår svenska avdelning ett pris "Årets institution 2007" från Svenska institutet med följande motivering:

- 1) För ett djupt och mångårigt engagemang för svenska språket och för brett anlagda studier av Sverige genom svensk litteratur, svensk historia och svenskt samhällsliv som genererar ett stort intresse för svenskstudier bland studenterna.
- 2) För att institutionen på olika sätt starkt har bidragit till många japaners positiva syn på Norden i allmänhet och Sverige i synnerhet.

I uppsatsen förklarar förf. dessutom om svenska språket och språkliga nära relationer mellan svenska och engelska.